

四国「石鎚山・飯野山(讃岐富士)」遠征報告

◇実施日：平成28年10月01日(土)～03日(月)

◇参加者：川島 功、沖崎吉信、前田 正、児嶋道夫、橋本 梓、大江加予子・徳子、畑林清子、生熊千満子、中前 偉、樋口義也、奥村順夫、竹中卓治、高階鈴子・美根子、石橋哲郎・隆子(紀ノ川SA)、青木宏充、梶野照雄、河野芳宏、佐藤宏子(以上南港)、椎木 堯・照子、三井幹雄、田中稔昭(以上登山口)。太字：車提供者。25名。

四国「石鎚山・飯野山(讃岐富士)」遠征決定の経緯

昨年、久々の遠征として、北海道の山(4泊5日)に出向いた。道内に於いても又、帰宅後も年一回位は遠征しようとの声が多く計画に着手した。戸隠山、北アルプスなどの声があったが、決めるとなれば迷うものだ。そんな中、畑林清子ちゃんより四国へ行った事が無いとの話と私自身も四国へ3回行ったが、四国の山へ登った事が無く、清子ちゃんの一声と幹事の特権で石鎚山と決めた。遠征だと一座ではもったいないので、当初剣山をセットとして思ったがアクセス時間に問題があって、四国では存在感のある飯野山(讃岐富士)をセットとした。

一日目 一日(土) 曇り。新宮発↓南港フェリー乗船

四国・石鎚山と決めても、交通手段で又迷う。陸路だけにするかフェリーを利用するか、陸路の場合どのルートにするか、和歌山・大阪組との合流は、安全第一の点からレンタカー28人乗りを借りて運転手を雇うかなど。安全・予算・時間が交錯したが、

まあー落ち着くところへ落ち着いたということか、児嶋さんがお隣の「新日本旅行社」へ声をかけてくれ、フェリーと宿泊の手配をお願いした。

出発当日、沖崎宅15時30分に集合も、皆さん早目に集合され、奥村・大江・沖崎車(各8人乗り)に分乗し出発。

途中、中前君宅に立寄り、龍神経由で紀の川SAで石橋さんご夫妻と合流の上、南港へ。ここまで略予定通りの時間である。

何年前か、九州に行った時、南港で1時間ロスする大迷いで大変迷惑をかけたので、今日の東予港行・オレンジフェリー乗場へは、徳子ちゃんに先導をお願いした。

フェリーターミナル待合室19時30分集合としていたが、迷うことなく15分前に到着して、此処で大阪組の青木・梶野・河野・佐藤さんの4名と合流した。



沖崎宅前出発打合せ



ターミナル待合室



船室でくつろぐ

指定の4階14号室の二等船室(25人部屋貸切)に20時に入室し、出港22時迄の約2時間は、夕食・入浴・おしゃべりであつと言う間に過ぎる。4階フロアーには、25人用の部屋が6室あるが、他の5室はガラガラ状態。25人部屋に20人ではやや窮屈かと思ったが、半数の方が前の部屋に移り、お陰でゆつくり寝ることが出来た。23時30分放送と同時に船室消灯。

行動タイム

新宮15:30→道の駅「龍遊」→17:55有田IC→18:15紀の川SA→南港
南18:40→19:10南港(乗船20:00)出港22:00→東予港へ。

二日目 二日(日) 曇り時々晴、山頂辺りはガス。

石鎚山(石鎚神社・弥山1974m、天狗岳1982m)登山

石鎚山は、四国のみならず西日本の最高峰の山として、古くからの名山のひとつで役ノ小角が初めて登ったとか、空海も修行したと伝わる修験の山である。

平安時代末期の「梁塵秘抄(りょうじんひしよう)には、聖のすみかはどこどこぞ、大峰、葛城、石の鎚、箕面よ勝尾よ、播磨の書写の山、南は熊野の那智新宮」という歌が載っている。大峰・熊野同様修験への関わりは深い。

5時半から船内で朝食、6時過ぎに下船し、途中コンビニで昼食・飲料等を調達し、約25km先の登山口へ向う。

登山口(ロープウェイ乗場下)に7時半頃に着く。ここで三井・田中・椎木ご夫妻と合流し、総勢25名が集結した。

山麓下谷駅(標高450m)8時少し前のロープウェイに乗り、約10分で山頂成就駅(標高1300m)に着く。



東予港着



登山口駐車場にて



山麓下谷駅・乗車前

此処から歩いて約20分で石鎚成就社(標高1450m)へ。境内は広く立派で旅館も4〜5軒ある。ここで日本の安全登山祈願の為、中前君導師で勤行を行う。祈願の冒頭は神社バージョンか、その後般若心経でいつもと違う様だ。



石鎚成就社で勤行



石鎚成就社・記念撮影



登山口の神門をくぐる

神門(石鎚山登山口)をくぐり、ここからいよいよスタートだ。いきなり八丁坂と呼ばれる長い下りで八丁だから約1km近く在る。帰りこれを登るのかよと思いつつ進む。

遥拝所の鳥居をくぐり鞍部に降りたら、ブナ林の中の急登木段道が始まる。進むにつれ早い人と遅い人があり隊列も長くなる。最近では、行仙宿・持経宿のみでモノレールもあって、全く歩いていけないうる。先頭の青木君から試し鎖下に着いたと無線が入る。すぐかと思いきや、先頭と相当離れている様で鎖下迄に15分以上要した。

試し鎖の前では、すでに上っている者、どっちか迷っている者、捲き道へ行く者と様々だ。

試しだから試してみようと取付く、直ぐ前には高階美根ちゃんが入っている。(帰ってガイドブックを見たら上り48m、下り1

9 mとある)。

ごつくてすごい鎖、運搬や取付けも大変だったろうに思う位、余裕があったが、上るにつれ濡れた岩と斜度もきつくなり、足を置く場所も厳しくなる。前の美根ちゃんも苦勞していたが、苦勞からビビリに変わる。下から靴底をささええステップを確保してあげる、やっとの思いで到着。ここから横々と思いきや又、厳しい下りだ。やっとな下まで来たが、ここでも青木君が下から、ここへ足を置き、そっちはダメだとサポートしていた。

鎖は両手に頼った強引な登り方を真似してはいけない。両手ではぶらさがるのはなく、基本は足で立ちつつ補助として両手を使い、安定を維持しながら体を上げていく。鎖は「三点支持」の一点とあるが、高齢者・非力な者・女性は無理しないことだ。



試し鎖前分岐



試し鎖を上る



前社ヶ森小屋で休憩

鎖下の前社ヶ森小屋で先行組が集まっているが、未だ7〜8人少ない。上を見ると大江親子が下りの鎖に取付いている。下から見るとハラハラする、やっとな全員集合。

試し鎖の通過に30分以上要しただろう。捲き道を来た佐藤さんは、大休憩出来て良かったと喜んでいいる。

ここから夜明(夜明かし)峠迄20分位か、その後は一の鎖(33m)をパスして捲き道へ。木の階段を登り、11時も過ぎやっとな山頂

も近い高度1820mの立派な公衆トイレ前に着く。もう少しだと二の鎖(5m)、三の鎖(8m)をパスして捲き道へ。これより斜度がいちだんと増す。ずっとなと木製・鉄の階段を登って来て疲れもピークだ。

3時間半位を要して11時45分やっとな弥山山頂に着いた、あーあーしんどかった、

最近ずっとなと雨だった為か、晴天とは言えないが雨の心配のない今日の日曜日は、数百人の登山者で山頂も大変混みあっている。何とかスペースを確保し、未だ7〜8人到着していないが、先着した者から昼食とする。



二の鎖前小屋



山頂・昼食休憩！



石鉋神社山頂記念撮影

昼食時、生熊さんのご近所の中地さん(亀の子会)が登頂されていて、その方から下の鎖場で転落事故があった様だと聞かされる。

7〜8人未着の者の内、何人か鎖に取付いているはず、まさか我々のぐるーぷではないだろうか心配になり、無線で最後尾の梶野氏に連絡をする。我々のぐるーぷではない、嬉しいことに一旦4名が山頂断念との連絡があったが、梶野、中前氏のサポートもあり、まもなく全員登頂するとの連絡が入る。

椎木・中前・河野氏らが転落を目撃して、高いイビキをかいながら横たわっていた。山頂はガスがかかりヘリが飛ばず、救助は難し

いだろう。

山頂では、ガスがかかり展望が望めない。三井さんから銘菓・塩饅頭の差し入れがあり、児嶋さんのコーヒーでしばらく休息。弥山山頂の石祠で、中前君導師で勤行して、熊野修験の「碑伝」を奉納する。

天候と疲れもあり、天狗岳登頂組(中前・樋口・前田・竹中・梶野・青木・生熊)と下山組に分かれて行動する事になる。

下山組は、13時過ぎに下山開始。13時20分頃、天狗岳での勤行が無線から流れる。



弥山・石祠で勤行

天狗岳山頂山容

天狗岳で勤行

夜明峠で小休止後、前社ヶ森小屋に着くと、警察帽子の方と出会う。転落者の救助ですかご苦労様と声をかけ、滑落を目撃した椎木さんを紹介する。聞きたい事もあるので、下山したら西条署の交番に立寄り、電話番号を教えてくださいとお願いされた。

天狗岳組は、夜明峠で小休止との連絡があり、八丁坂手前で追いついた。

石鎚神社中宮と石鎚成就社に無事下山のお礼の勤行を行い、16時20発のロープウェイに間に合うように急いで山頂駅へ。駐車場まで椎木さんとお別れし、今日宿泊の坂出市の瀬戸内荘へ

向った。坂出市手前の高速道からの飯野山は、やや薄くらい中ではあるが、本当に存在感のある山で、見事な山容だ。

予定より約15分遅れの18時15分に宿舎に到着し、入浴後、19時30〜21時迄の夕食・懇親会が開かれた。

梶野氏は、徳島から和歌山へ渡るフェリーの出港時間の関係から、懇親会には参加し帰郷した。



夜明峠小休止



成就社・売店前



成就社で下山勤行



瀬戸内荘・夕食懇親会(飲み放題)

行動タイム

6:00 東予港6:30→7:15 登山口駐車場→山麓下谷駅8:00(ロープウェイ)8:10 成就山頂駅→8:30 石鎚成就社8:45→9:45 試し鎖分岐→10:15 前社ヶ森小屋10:30→10:40 夜明峠→11:15

11:50 石鎚神社山頂(弥山)13:10↓(石鎚神社)天狗岳往復約30分
 ↓13:55 夜明峠14:05↓前社ヶ森小屋14:30↓八丁分岐15:05↓
 15:40 石鎚成就社15:55→16:10 山頂駅16:20→16:35 登山口駐車場
 16:50→17:20 西条IC→18:10 坂出IC→18:15 瀬戸内荘(宿泊)。

三日目 三日月 曇り後雨。飯野山登山と帰路へ

昨晩は飲み過ぎで頭が痛い。7時から朝食、8時にロビーで打合せをして、登山口の飯野町・野外活動センターへ向う。

山の少ない香川県にあって、この山は存在感のある山だ、讃岐富士との呼び名のある独立峰で、見事なまでの円錐状の山姿をしている。

大昔、まだ人が住んでいない時代に「おじよも」と呼ばれる大男がいて、日本各地に土を盛って山を作ったその一つだそう。讃岐平野にはこの種の山が多いが、その中の盟主と言えるだろう。

野外活動センター近くの駐車場に止めたが、月曜日なのに駐車場はほぼ満杯で、親しまれ健康のために登っている人が多い様だ。頂上まで2200mの概念図があり約1時間位か。



野外活動センターP



出発前の記念撮影



飯野山登山口

この山は国有林の様で、どの山にもありがちな杉・桧の植林がなく自然林の山だ。略山腹を一周するように登る登山道で、所々

展望の良い場所があつて、平野・市街地、ため池、瀬戸内海、そして瀬戸大橋も見える。急登もなく1時間5分で飯野山(三等・421.9m)に立った。
 頂上は広く薬師堂、不動堂、昭和天皇歌碑、新百名山石柱もあり、少し下った所には「おじよも」の足跡もある。



六合目辺り小休止



飯野山・三等三角点



昭和天皇歌碑と新百名山

ここでも喫茶児鳴がオープン、いつも有難うございます。中前君は、石鎚山同様、熊野修験の碑伝を納めている。今年8月「山の日」に、山上さんが登拝された碑伝が残こされていた。



飯野山山頂にて



不動堂で勤行



喫茶児鳴オープン

三井・河野のご両人は、石鎚山は数回登っているが、この山は始めてで、我々は石鎚がメインでなく飯野山がメインと話された。駐車場に戻る頃には、小雨が降りはじめ。丸亀市で本場さぬきうどんの昼食後、三井さんと別れた。

イオンモールで買物を済ませ、雨の中を走行し淡路SAで休憩後、沖崎車に分乗の田中・青木氏を神戸麻耶で降ろす。

各車合流の泉大津PAへ、神戸市内を抜けるルートによって30分強の到着時間差があった。ここで河野・佐藤さんと別れて、紀の川SAで軽い夕食後、石橋夫妻と別れる。

雨も止み中辺路道の駅で小休止後、尾鷲・海山組の奥村車は、宮井大橋で別れて帰路に着いた。

行動タイム

瀬戸内荘8:15→8:40野外活動センターP8:55→9:55飯野山
10:30→11:15駐車場11:30→11:40昼食・うづん屋12:20→12:30
イオンモール13:15→13:25坂出IC→15:00淡路SA15:30→泉大津
PA17:45→18:10紀の川SA18:40→19:40上富田IC→中辺路道の駅→
21:15新宮。(全走行距離約810km)

一、当初9月上旬を計画したが、台風シーズンでもあり10月上旬とした。9月はずつと天気が悪く、実施日の天気予報も台風が近づき曇りか雨と心配したが、三日間とも晴天とまでとは言えないが、雨具も着用することなく、雨と台風の「すきま」で降られなかった事はラッキーであった。

二、石鎚山は25名、飯野山22名の参加であった。

特に石鎚山では、途中リタイヤするかも知れないとの申出があったが、皆さんガンバって、両山とも事故・トラブルもなく全員が山頂を踏んだことは、大変嬉しいことであった。

三、大江徳子ちゃん北海道同様、事前の調査と各車のカーナビ設定等の尽力によりスムーズに計画が遂行され感謝したい。

四、石鎚山に於いて不幸にも鎖場での転落死亡事故に遭遇した。我々も老域に入っている、山行も又作業も「安全第一」である。「事前の情報収集」「適切な判断・指示」「自分の体力」等々、常に緊張感を緩めてはいけない「他山の石」としなければならぬ。

五、帰路、湯川一郎君から転落死の方は、職場の先輩ですとのメールが入った、世の中狭いものである。

寄贈者

熊野修験(高木亮英)：金一封(五千円)。玉岡憲明：ビール2箱。
椎木堯・佐藤宏子：清酒(4合瓶)。石橋哲郎：焼酎(4合瓶)。
三井幹雄：菓子箱(塩饅頭)。

(記 沖崎。写真 梶野・川島)

石鎚山、三の鎖転落事故遭遇の顛末

ニュースでご存知かとは思いますが、岡山市の男性が三の鎖で転落死しました。

私は、ぐるーぷの最後尾で体力に自信のないメンバー四人をひっぱっていました。転落死された方の6名グループとは着かれ離れずに二の鎖まで一緒でした。その間に数回言葉を交わしています。

二の鎖手前で、先を行っていた中前さんが最後尾に加わってくださいました。新しくなった二の鎖小屋で全員の到着を待ち、ここで待機するか、登る場合は鎖場を通らず捲き道を登ること、そうすれば下山してくるメンバーと必ず出会えることを伝えて、中前さんと2人で二の鎖を登り始めました。

二の鎖中間部で、既に山頂に到着している先頭のメンバーから「三の鎖で転落事故があったようだ。我が我々の仲間は大丈夫か？」と連絡があり、最後部の人は鎖場を通らず捲き道を登っていることを告げて三の鎖へ向かいました。

三の鎖では、左に2本、少し離れた右に1本の鎖がありますが、右側の1本の鎖の基部から2m程離れたところに男性が仰向けに横たわっています。誰も登っていない下り用の1本の鎖に一人で取付いたようです。

単独で登っていたので、転落に至る状況は、本人以外わかりません。

転落の途中で岩角に数回当たり、基部でワンバウンド、2m離れた場所で停止したようです。

傍には男性の奥様とみられる女性やその仲間、通り合わせた森林管理事務所の職員2名がいました。

管理事務所の職員は、警察や消防の連絡手順や救助体制などを説明しています。

転落者は意識無し、右腕肘に擦過傷、左腕はおかしな方向に向いている以外は、大量の出血も認められません。自発呼吸はあるがイビキをかき始めています。脳に損傷を受け重篤な状況であることは一目でわかりました。

転落男性の奥様と思われる女性は、電話で冷静に住所、氏名、生年月日を答えておられました。男性の状況を正確に認識されていたかは定かではありません。

山頂部はガスがかかっています、2014年の殉職事故の後、ヘリの飛行条件が厳格な運用となったのでヘリは来ないだろうと、管理事務所の職員は教えてくれました。

事故当時、三の鎖を登っていたぐるーぷの複数のメンバー(椎木・中前ら)は、転落を目撃したそうです。

ある人は人が落ちていくのを認識、ある人は何かが落ちたのを見た様でした。多数の人が鎖に取付いていましたが、その場から動けなくなった人や、登るのを止めて降りた人もいたようです。

広島椎木さんは、人が落ちていくのが判ったので、鎖を降りて行ったそうです。

下ではちょうど登ってきた白装束の石鎚講の4名が、警察と消防に電話連絡、居合わせた看護師の方が転落者の気道確保をされたようです。

この状況では、何も出来ることが無いので10分ほど現場を離れて山頂に向かいました。

下山を始めてすぐに救急車のサイレンが遠くに聞こえました。土小屋の方からです。

三の鎖では転落者の仲間が心配そうに待っていました。救急車のサイレンが聞こえたこと、2時間以内に救急隊は到着することを伝えて急ぎ下山します。この時点で事故が起きてから2時間ほど経過していました。大きかったイビキの音は全く聞こえません。

一の鎖下で登ってくる西条署の山岳警備隊員3名と出会いました。「ご苦労様です」と声をかけ、転落者の状況を伝えました。

転落直後にすぐかったイビキが、下山時には全く聞こえなかったこと、既に死亡している可能性が高いことなどを説明、全員20代前半の若い隊員ですが、礼儀正しく「ありがとうございました」とお礼を言われて、速足で登っていききました。

すぐ後を隊長かと思われる30代位の隊員が登ってきました。ここでも転落者の状況を簡単に説明。その後、前の4隊員とは少し体型が違う西条署の職員が登ってきました。背中には長方形の箱状の荷物を背負っています。

前述の4名は登攀用具などを携えていましたが、この人は箱だけでした。検証に必要な機材なのかも、と思いました。

へりの音が聞こえてきましたが、山腹に近寄っては来ず、報道のへりだと判断しました。(FNN系のニュースで映像が使われていました)

以上が転落事故遭遇の顛末です。

人間の生存本能はすぐくて、転落の衝撃で脳の働きがほとんど停止しても、損傷のない心臓の動きを維持しようと、呼吸を大きくしてイビキのような音を出します。最初は小さな音ですが、徐々に大きくなり、三の鎖上部でも聞こえるほどでした。

このイビキが聞こえなくなった時が命の火が消えた時でしょう。この事故では、皆の話から高さが一〇mを越えた位置から落ちた可能性が高く、ヘルメットで脳の損傷を防げたかはわかりませんが、5m程度の高さだとヘルメットは十分に機能すると思われる。

(記：梶野)

追記

3日の帰路、彦根市・湯川一郎君から沖崎氏の携帯にメール着信があり、転落死した方は、同じ会社の岡山造幣局ぐるーぷで、年令62才の先輩で知っている方との連絡があり、ビックリした。全く無関係と思っていました。思わぬつながりで世間は狭いと痛感しました。